

復活節第7主日礼拝説教「ひとつになる道」

日本基督教団藤沢教会 2010年5月16日

- 1 主が油を注がれた人キュロスについて、主はこう言われる。  
わたしは彼の右の手を固く取り、国々を彼に従わせ、王たちの武装を解かせる。  
扉は彼の前に開かれ、どの城門も閉ざされることはない。
- 2 わたしはあなたの前を行き、山々を平らにし、青銅の扉を破り、鉄のかんぬきを折り
- 3 暗闇に置かれた宝、隠された富をあなたに与える。  
あなたは知るようになる、  
わたしは主、あなたの名を呼ぶ者、イスラエルの神である、と。
- 4 わたしの僕ヤコブのために、わたしの選んだイスラエルのために  
わたしはあなたの名を呼び、称号を与えたが、あなたは知らなかった。
- 5 わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない。  
わたしはあなたに力を与えたが、あなたは知らなかった。
- 6 日の昇るところから日の沈むところまで、人々は知るようになる  
わたしのほかは、むなしなものだ、と。  
わたしが主、ほかにはいない。
- 7 光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。  
わたしが主、これらのことをするものである。 (イザヤ書 45章1～7節)

15 こういうわけで、わたしも、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、16 祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています。17 どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、18 心の目を開いてくださるよう。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。19 また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるよう。20 神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、21 すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。22 神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。23 教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

(エフェソの信徒への手紙 1章15～23節)

1 イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。2 あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。3 永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。4 わたしは、行方不明にあなたとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。5 父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。

6 世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。7 わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。8 なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。9 彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのもだから

です。10 わたしのもはすべてあなたのも、あなたのもはわたしのもです。わたしは彼らによって栄光を受けました。11 わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。12 わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。13 しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るの、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。」

(ヨハネによる福音書 17章1～13節)

主イエスの祈り

主イエスのご復活を祝うイースターから四十日目は、主の昇天の記念日。今日の御言葉は、主キリストが地上でのすべてのお働きを完成されて、天の天にいます万物の父なる神の御許にいらっしゃることを告げ教えています。

その中で、福音書の御言葉が伝えるのは、主イエスの祈りです。十字架に架けられる日の前夜、最後の晩餐の後に、弟子たちの見守る中で天の御父に向かって、主は祈られました。このとき、主イエスは、いよいよ天の御父のもとにお帰りになるときが来たことを悟られていたのです。そこで、ご自身の地上での働きが確かに完成されるように、つまり、弟子たちのために、弟子たちに続く者たちのために、また全人類のために、祈られたのです。

弟子たちは、どのような気持ちで、この祈られる主イエスのお姿を見ていたのでしょうか。その祈りの言葉を耳にして、どのような思いを与えられていたのでしょうか。主は、自分たちのために祈ってくださっている。弟子たちは、何よりもそのことを、深く心に刻んでいたのではないのでしょうか。

自分のために祈ってくれる人がいる。祈り続けてくれている人がいる。そのことに気がつくことは、本当に大きなことです。わたしの取るに足りない人生の中でも、あの人、この人が、自分のために祈ってくれているということに気づくことができたことは、今ある自分にとって大きなことでした。今ここに牧師として立つことができるのも、この教会の信仰の家族の皆さんが祈りのうちに覚えてくださっているからこそです。信仰の家族の皆さんが牧師のために祈ってくださっている。そのことを知らずに牧師として立ち続けることは難しい。ほとんど不可能です。それは、皆さんも同じだと思います。信仰の家族のあの人、この人が、自分のことを祈りに覚えてくれている。そのことを知らずには、わたしたちは、教会に留まり続けることも、信仰に立ち続けることも、本当に難しい。

弟子たちは、主イエスの祈りの言葉を聴いて、そこで自分たちのために祈ってくださっている主に気づきました。いや、今までも、主イエスは、弟子たちのために祈ってくださっていたでしょう。けれども、この最後の晩の祈りは、特別であったのです。主が十字架で死なれて、三日目に復活して現れてくださって、弟子たちの新しい歩みが始まったときに、恐らく、彼らは、互いに語り合ったのです。「主は、最後の晩に、わたしたちの目の前で、わたしたちのために、こんな言葉で祈ってくださった」。そう語り合いながら、弟子たちのうちには、喜びが

あふれたのに違いありません。「主は、復活されて、天の御父のもとに昇られて、今は、見えるお姿ではいらっしやらなくなった。でも、主は、あの晩にわたしたちのために祈ってくださった主は、わたしたちの中に、今も確かにおいでくださっている。主は、わたしたちの中で、生きてお働きくださっている」。

### 主イエスの栄光は、わたしたちによって！

わたしは、ときどき、自分の祈りの貧しさに落胆させられます。祈りの中で、本当に神と向き合っているだろうか。神との交わりをいただくことができているだろうか。神に深いところで触れていただくことができているだろうか。むしろ、無駄なお喋りや美辞麗句、決まり文句を口先で祈っているばかりなのではないか。

そう思われるのは、信仰の家族の交わりの中で、本当に深い祈りに触れさせていただくことがあるからです。ああ、この人は、本当に神の御顔を確かめながら、深いところでその御手に触れていただきながら、祈っていらっしやる。そういう人がいらっしやるのです。ご自分で、そういう自覚があるか分かりません。はっきりと自覚されていらっしやる方もあるでしょう。自覚がなくても、祈りの中で、本当に神と一つになられていることも、あるのだと思います。いずれにしても、そういう方の祈りに触れさせていただくことがある。すると、それは、後から自分の祈りの貧しさに落胆させられることにもなるのですけれども、それ以上に、そういう祈りの事実、一人の人が神と深く交わり、触れていただき、一つとなられている事実、に、圧倒される。そういう経験を、しばしばいたします。

主イエスの祈りは、そのとき、弟子たちを圧倒したのだと思います。そのときには、弟子たちは、その圧倒されたことの意味を良く分からなかったかも知れない。けれども、弟子たちは、後から振り返って、その祈りの中で主イエスが神と一つになられていたこと、深い交わりのうちにあられたことを、思い起こさないではいられなかった。もちろん、主が天の御父と一つであることは、その御教えの中ですでに聴いていたはずです。けれども、弟子たちは、何よりも主が祈られたときに、その祈りによって、主が天の御父と一つでいらっしやることを、本当にそうだと、知るようになったのではないのでしょうか。

その祈りの中で、主イエスは、弟子たちのために祈られたのです。弟子たちを、天の御父との深い交わりの中に、お招きくださった。天の御父と一つであることの喜びを、弟子たちの中にも満ちあふれさせようとしてくださったのです。

このとき、主イエスが祈られたときには、弟子たちは、主が祈りによってお招きくださったところに、すぐに進み行くことはできませんでした。主がお与えくださるといふ喜びを、すぐに自分たちのものとするにはできませんでした。むしろ、弟子たちの中にあつた思いは、主と結ばれることへの期待ではなく、主と別れなければならない悲しみでした。主のおっしゃられる喜びで心満たされるどころか、いよいよ悲しみが深まっていく、そのような中であつたのです。その悲しみは、この祈りが祈り終えられたときから、いよいよ現実のもととしてピークに達することになったのです。

弟子たちの悲しみ。別れの悲しみです。しかも、それは、裏切り、見捨てることによって引き起こされた別れの悲しみです。後悔、自己嫌悪、落胆、嘆き、絶望。どんな言葉で言い表したらよいか分からない悲しみの現実であつたでしょう。

弟子たちは、そのような現実を目を向けることを恐れました。避けて通ろうとしました。むしろ、主イエスこそ、その悲しみの現実を、直視していらした。「はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れる。…あなたがたは悲しむ…」(16:20)とおっしゃられたのは、主イエスでいらした。にもかかわらず、主は、祈りの中で言われたのです。「彼らは、御言葉を守りました。わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。…わたしは、彼らによって栄光を受けました」(6~10節)。

主イエスは、祈られて、神と一つになられて、確かな約束を宣言してくださったのです。弟子たちが、ひどい悲しみの現実の中に陥ることになる弟子たちが、それでも、必ず、そこから引き上げられて、主と出会い、神と一つとされる喜びに満たされることを迎えることになる、と。だれも、悲しみの現実の中に陥ったままではいることはない。必ず、神と一つとされる喜びに満たされることを迎えることができる、と。いや、むしろ、その現実の悲しみをとことん味わった者にこそ、主は、その悲しむ心の内に、空洞になった心の内に、豊かに満ちあふれるほどの喜びを注ぎ込んでくださる、と。

祈りの中で神と一つになられていた主のその宣言を、弟子たちが悲しみの現実の中でなお心に留めておくことができたのは、何と幸いなことだったのでしょうか。

### わたしたちも天を仰いで祈ろう！

天を仰いで、主は祈られました。うなだれて、地に顔を向けて、祈られたのではありません。天の御父のいらっしやる場所に顔を向けられて、御父と顔と顔を向き合わせて、御父の御心を確かめるようにして、主イエスは祈られました。弟子たちのために、わたしたちのために、すべての人のために。

わたしたちは、今、ここで、この祈られる主イエスの傍らに置いていただいています。この祈りの言葉を聴かせていただくために。そればかりか、この祈りの言葉を、わたしたちも大胆に祈らせていただくために。この祈りによって、弟子たちの内に喜びを満ちあふれさせてくださった主は、弟子たちに、わたしたちに、この祈りを託してくださったのです。すべての人が、この主イエスの祈りの傍らに身を寄せる機会を与えられるためです。わたしたちの家族も、友人も、すべての隣人が、この現実の深い悲しみの中から引き上げられて、主の喜び、神と一つとされる喜びに満たされるようになるためです。わたしたちすべての者が、一つの喜びに満たされて、互いに一つとされるようになるためです。

### 祈り

主よ。あなたの祈りの傍らに置いてください。もう悲しみの中に留まろうとは思いません。あなたが共にいてくださるからです。あなたの喜びで満たしてください。あなたの御顔を仰ぎ見て、大胆に、父よ、と祈らせてください。アーメン